

【3】 パーリ聖典における「仏弟子を上首とするサンガ」の用例と実態

[0] 次に「仏弟子を上首とするサンガ」の検討に移りたい。「仏を上首とするサンガ」の規模が1,250人とか1,000人、500人と多いことはともかくとして、4人以上からなる現実的なサンガをさすかぎり、「仏弟子の誰かを上首とするサンガ」が存在しえるであろうことは十分に推測されるところである。

[1] まずパーリの原始聖典の中に現れる、仏弟子の誰かを「上首とするサンガ」と表現する用例を紹介する。以下にはそれらのサンガを示すような語句にアンダーランを付しておく。

(1) 世尊がチャートゥマー (Cātumā) のアーマラキー園におられたとき、舎利弗・目連を 上首とする 500 人の比丘たちが (SāriputtaMoggallānapamukhāni pañcamattāni bhikkhusatāni) 世尊に会うためにやって来て、新来比丘たちは旧住比丘たちと (āgantukā bhikkhū nevāsikehi bhikkhūhi saddhiṃ) 挨拶を交わして騒がしかった。そこで釈尊は叱って去らしめた。チャートゥマーの釈迦族や梵天がこれを留めて、もしこのまま去らしめれば異心・変心が起こるかも知れないと世尊をなだめた。世尊は心を和らげ、舎利弗と目連に次のように問うた。「自分が比丘サンガを去らしめたとき、あなたたちはどのように考えたか」と。舎利弗は「世尊は今静かに現法樂住に住されるのであろう。我等も今静かに現法樂住に住しようと考えました」と答えた。世尊は「待て、そのような心を再び起こしてはならない」と叱られた。目連は「世尊は今静かに現法樂住に住されるのであろう。今は私と舎利弗が比丘サンガを指導しよう (ahañ ca dāni āyasmā ca sāriputto bhikkhusaṃghaṃ parihareyyāma) と考えました」と答えた。世尊は「善哉、善哉、実に、私かあるいは舎利弗と目連が比丘サンガを指導するべきである (ahaṃ vā hi bhikkhusaṃghaṃ parihareyyāma SāriputtaMoggallānā vā)」と説かれた。MN.67 Cātuma-s. (車頭聚落經 vol.I p.459)

(2) あるとき世尊は舎衛城のジェータ林の給孤独園に住されていた。その時ヴェールカンダカ村の住人、ナンダマター優婆夷は舎利弗と目連を 上首とする比丘サンガに (SāriputtaMoggallānapamukhe bhikkhusaṃghe) 六支具足の布施をなした (chaḷaṅgasamannāgataṃ dakkhiṇaṃ patiṭṭhāpeti)。世尊はこれを天眼をもって見られて、比丘らよ、かのヴェールカンダカの住人、ナンダマター優婆夷は舎利弗と目連を 上首とする比丘サンガに (SāriputtaMoggallānapamukhe bhikkhusaṃghe) 六支具足の布施を作す、何が六支具足の布施であるか、……と説法された⁽¹⁾。AN.006-004-037 (vol.III p.336)

(1) 「六支具足の布施」とは、布施するより前に心喜び、布施するときに心が清らかになり、布施してから満足するのが施者の三支であり、貪を離れあるいは貪を離れようと努力し、瞋を離れあるいは瞋を離れようと努力し、癡を離れあるいは癡を離れようと努力することが受者の三支である、とされている。

(3) ある時具寿舎利弗と具寿目連は大比丘サンガとともに南山において遊行していた (āyasmā ca Sāriputto āyasmā ca Mahāmoggallāno Dakkhiṇāgirismiṃ cārikaṃ

caranti mahatā bhikkhusamghena saddhim)。……その時、ヴェールカントキー・ナ
ンダマター優婆夷のところに毘沙門天が現れ、明日舎利弗と目連を上首とする比丘サ
ンガは (SāriputtoMahāmogallānapamukho bhikkhusamgho) 朝食をなさずしてヴェー
ルカントカにやって来るから、この比丘サンガに供養してくれといった。そのとおりに
舎利弗と目連を上首とする比丘サンガは (SāriputtoMahāmogallānapamukho
bhikkhusamgho) 朝食をなさずしてヴェールカントカにやってきたので、ナンダマター
優婆夷は比丘サンガ (bhikkhusamgha) を招待した。舎利弗と目連を上首とする比丘サ
ンガは (SāriputtoMahāmogallānapamukho bhikkhusamgho) ナンダマター優婆夷
の住所に行き、行って設けられた座についた。その時ナンダマター優婆夷は舎利弗と
目連を上首とする比丘サンガに (SāriputtaMahāmogallānapamukham
bhikkhusamgham) 殊妙なる嚼食と噉食とを手ずから供養した。AN.007-005-050
(vol.IV p.063)

- 〈4〉ある時世尊は、舎衛城のジェータ林の給孤独園に住されていた。その時、ヤソー
ジャを上首とする500人の比丘たちは (Yasoĵapamukhāni pañcamattāni bhikkhusatāni)
世尊に会うために舎衛城にやってきて、新来比丘たちは旧住比丘たちと (āgantukā
bhikkhū nevāsikehi bhikkhūhi saddhim) 挨拶を交わして騒がしかった。世尊は「漁師
が魚を引き上げるときのように騒がしい、比丘らよ去れ、私はあなたたちを放逐する、
私のそばに住んではならない」と叱って去らしめた。比丘らはヴァッジの人々の中を遊
行してヴァグムダー河 (Vaggumudā nadī) に近づき、河の畔りに草屋を作って雨安
居に入った (paṇṇakutiyo karitvā vassaṃ upagacchimsu)。そのとき、尊者ヤソー
ジャは比丘たちに (bhikkhū) 告げて言った、「友らよ、世尊は私たちの利益のため、利便
のために、同情して私たちを放逐されたのである。世尊が私たちの居住を喜ばれるよう、
私たちは住居を準備しよう」と。このようにして比丘たちは遠離し、不放逸にして専心
に住し、その雨安居の間に皆悉く三明を得た。Udāna 003-003 (p.024)
- 〈5〉……このようにヤソーヴァティーを上首とする一万の比丘尼たちは (Yasovati
pamukhāni dasabhikkhunī saḥassāni) 世尊の面前においてこれらの偈を唱えた。
Apadāna 04-03-029 (p.592)
- 〈6〉ヤソーダラーを上首とする一万八千の釈迦族生れの比丘尼たちは (atthārasasahassāni
bhikkhunī Sakyasambhavā Yasodhari-pamukhāni) 等覚者のもとに近づいた。すべて
大神通力があった (sabbā honti mahiddhikā) 一万八千は、牟尼のみ足に敬礼して力に
応じて告げた。……このようにヤソーダラーを上首とする一万八千の比丘尼たちは
(Yasodharā pamukhāni atthārasabhikkhunī saḥassāni) これらの偈を唱えた。
Apadāna 04-03-030 (p.596)
- 〈7〉……このようにヤサヴァティーを上首とする一万八千のクシャトリヤの童女比丘尼た
ちは (Yasavati pamukhāni khattiyakaññā bhikkhuniyo atthārasasahassāni) 世尊の
面前においてこれらの偈を唱えた。Apadāna 04-03-031 (p.597)
- 〈8〉そのときアッサジとプナッバスカという名のキターギリを住処にする無恥の悪比丘が
あった (Assajipunabbasukā nāma Kiṭāgirismim āvāsikā honti alajjino pāpabhikkhū)。
彼等は自ら木を植えたり、人に教えて植えしめたりなどの非行を行った。そのとき一人

の比丘がカーシにおいて雨安居を過ごし、世尊に会うために舎衛城に行こうとして、キターギリを通りかかった。一人の優婆塞がこの比丘にアッサジとプナッバスカらが非行を行っていることを世尊に伝えるよう頼んだ。この比丘は舎衛城に到着し、この事を世尊に伝えた。世尊はこれが事実であることを確認されてから、舍利弗・目連に告げて言われた、「行け、舍利弗らよ、キターギリに行きアッサジ・プナッバスカの徒の比丘等にキターギリからの驅出羯磨を行いなさい。彼等はあなたがたの共住弟子である (tumhākaṃ ete saddhivihāriṇo)」⁽¹⁾と。舍利弗らは「私たちはどのようにしてアッサジ・プナッバスカの徒の比丘らにキターギリからの驅出羯磨を行いましょうか。あの比丘らは暴戻醜惡です」と尋ねた。世尊は「舍利弗らよ、それならば多くの比丘とともに (bahukehi bhikkhūhi saddhim) 行きなさい」と答えられた。そこで舍利弗と目連を上首とする比丘サンガは (SāriputtaMoggallānapamukho bhikkhusaṃgho) キターギリに行き、アッサジ、プナッバスカの徒の比丘等にキターギリからの驅出羯磨を行ない、「アッサジ、プナッバスカの徒の比丘等はキターギリに住してはならない」と言った。Vinaya「羯磨鍵度」(vol.II p.009)

(1) ‘saddhivihārin’ 戒を受けた和尚の弟子のことで、アッサジ・プナッバスカからはそれぞれ舍利弗か目連の弟子であったのであろう。

〈9〉 同前。Vinaya Saṃghādisesa 013 (vol.III p.179)

[2] 仏弟子のだれかを「上首とする」とダイレクトに表現するパーリ聖典の用例は以上のみである。しかもそれを「サンガ」とするのは〈2〉〈3〉〈8〉〈9〉のみで、その上首は舍利弗・目連のみである。しかし〈1〉には「サンガ」という言葉は用いられていないが、「舍利弗・目連を上首とする500人の比丘たち」とするから、これも同様の用例と見なしてよいであろう。

ということになれば〈4〉もヤソージャと共にいたのは「500人の比丘たち」とするから、これもその用例と見なしうるし、〈5〉の「ヤソーヴァティーを上首とする一万の比丘尼たち」、〈6〉の「ヤソーダラーを上首とする一万八千の釈迦族生れの比丘尼たち」、〈7〉の「ヤサヴァティーを上首とする一万八千のクシャトリヤの童女比丘尼たち」も同様ということになる。

[2-1] このように指導者的な位置にある仏弟子とともに何百人からの比丘たちが共にいたとか、大比丘サンガと一緒にあったなどというのも、「仏弟子を上首とするサンガ」と見なすことができるとするならば、これには次のような用例が見いだされる。

次は共にいた比丘あるいは比丘尼たちを「サンガ」とする表現するケースである。資料番号は前項から続ける。以下には指導者的な位置にある者の名とサンガであることを示す語句にアンダーラインを付す。

〈10〉 その時、具寿摩訶迦葉はパーヴァーよりクシナーラーに至る大道を、500人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhim pañcamattehi bhikkhu-satehi) 進んでいた。そのとき具寿摩訶迦葉は、道より退いて一樹下に坐した。その時、一人の邪命外道がクシナーラーより曼陀羅華を持って、パーヴァーに至る大道を進んできた。具寿摩訶迦葉は、向こうから邪命外道のやって来るを見て言った。「友

- よ、我等の教主を知っていますか」と。彼は「はい、友よ、私は知っています。今日より七日以前に、沙門ゴータマは般涅槃に入られました。だから私はこの曼陀羅華を持っているのです」と答えた。*DN.016 Mahāparinibbāna-s.* (大般涅槃經 vol. II p.162)
- 〈11〉ある時、尊者クマールカッサパは 500 人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhim pañca-mattehi bhikkhu-satehi) コーサラの人々の間を遊行して、セータヴァヤーと称するコーサラの町に行き、その北方のシンサバー林に住した。その時、王族パーヤーシはセータヴァヤーに居住していた。この町はコーサラ国王パセーナディより授けられた浄施の拝領地であった。*DN.023 Pāyāsi-s.* (弊宿經 vol. II p.316)
- 〈12〉あるとき世尊は王舎城竹林迦蘭陀園に住されていた。その時具寿舍利弗は大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhim) 南山に遊行した。舍利弗は随意の間南山に住し、それから王舎城に向けて遊行した。王舎城において舍利弗はダーナンジャーニ・バラモンと会い、彼のために法を説いた。*MN.097 Dhānañjāni-s.* (陀然經 vol. II p.184)
- 〈13〉その時具寿阿難は、大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhim) 南山に遊行した。時に阿難の 30 人ほどの共住弟子の比丘たちは (tiṃsamattā saddhivihārino bhikkhū)、学を捨てて還俗し、全く童子のみとなった。遊行から帰った阿難は王舎城の竹林栗鼠養餌所にいる摩訶迦葉を訪ねた。摩訶迦葉は「なぜ行儀の伴わない年少比丘とともに遊行するのか。友阿難よ、あなたの年少の徒衆は破壊した (olujjati te parisā)、あなたの徒衆は壊滅した (palujjati te navappāyā)。この童子は量を知らない (na vāyaṃ kumārako mattam aññāsi)」と非難した。阿難は「頭に白髪が生えた者 (sirasmiṃ phalitāni jātāni) を童子という言葉 (kumārakavāda) をもって咎めるのですか」と反論した。これを聞いていたトゥッラナンダー (Thullanandā) 比丘尼は「どうしてかつて外道であった (aññatitthiyapubba) 摩訶迦葉はヴィデーハの聖者なる (vedehamuni) 尊者阿難を童子という言葉をもって咎めるのか」と迦葉を非難した。*SN.016-011* (vol. II p.217)
- 〈14〉ある時、世尊は舎衛城のジェータ林の給孤独園に住しておられた。その時、舍利弗はマガダのナーラ村に住し、重病に罹っていた。チュンダ沙弥 (Cunda samaṇuddesa) が舍利弗の侍者であった。そのとき具寿舍利弗はその病気によって般涅槃した (parinibbāyi)。チュンダ沙弥はこれを阿難に報告し、二人で世尊のところに行った。阿難が舍利弗が般涅槃したと聞いたとき、身体が酒に酔ったように、あたりが真っ暗になって、ものが見えませんでしたと言ったので、世尊は「阿難よ、舍利弗は戒・定・慧・解脱・解脱知見蘊を取って般涅槃したのか」と尋ねられた。阿難が「そうではありません。しかし具寿舍利弗は私を教誡してくださり、渡して下さり、教授して下さるなどしてくださいました。だから具寿舍利弗を憶念するのです」と答えると、次のように説法された。一切は滅するもので、例えばしっかりとした大樹が立っていても、大きな枝が先に破壊するように、しっかりとした大比丘サンガが立っていても (mahato bhikkhusaṃghassa titṭhato sāravato) 舍利弗は般涅槃する。作られたものに常なるものではなく、一切は滅する。だから自らを島とし、自らを抛り所とし、他を抛り所とせず、

法を島とし、法を抛り所とし、他を抛り所とせずに住しなさい、と。SN.047-013 (vol. V p.161)

〈15〉 そのとき摩訶迦葉は比丘たちに告げて言った。あるとき、私は 500 人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañcamattehi bhikkhusatehi) パーヴァーとクシナーラーの間の道におりました。そのとき私たちは、世尊が亡くなったことを知りました。未だ離欲していない比丘たちは「善逝が般涅槃されるのがどうしてこんなにも早いのか、世間の眼が滅されることがどうしてこんなにも早いのか」と嘆きました。すでに離欲している比丘たちは正念正知にしてこれを耐え忍びました、「諸行は無常である、どうして〔常なることを〕得ようか」と。その時、スバツダと名づける老年出家者があり、彼は「友等よ (āvuso)、憂える必要はない、私たちがあの沙門より脱することができたのはよい、これは適法、これは不適法と私たちを悩ました。今や私たちはもし欲すればなし、欲しなければなさないようにしよう」と言いました。Vinaya「五百韃度」(vol. II p.284)

〈16〉 時に、具寿摩訶迦葉はサンガに表白した (saṃghaṃ nāpesi)。「サンガは、私の話を聞け (suṇātu me āvuso saṃgho)。もしサンガに機が熟したならば (yādi saṃghassa pattakallaṃ)、サンガはこの五百比丘を選んで (saṃgho imāni pañca bhikkhusatāni sammanneya) 王舎城において雨安居に住して法と律とを結集せしめ、余の比丘等をして王舎城において雨安居に住することがないようにしよう」と。そしてサンガはこれを白二羯磨によって承認した。Vinaya「五百韃度」(vol. II p.285)

〈17〉 長老比丘たちによって (therehi bhikkhūhi) 法と律とが結集されていた時、具寿プラーナは 500 人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañcamattehi bhikkhusatehi) 南山に遊行していた。随意の間南山に住した後、プラーナは王舎城竹林迦蘭陀園の長老比丘等のもとに行った。長老比丘たちは具寿プラーナに言った。「友プラーナよ (āvuso Purāṇa)、長老たちによって法と律が結集された、この結集を受けよ (opehi taṃ saṃgītiṃ)」と。プラーナは、「友等よ (āvuso)、長老たちによって法と律がよく結集されました。けれども私は世尊の現前に聞き現前に受けたように保持していきます」と言った。Vinaya「五百韃度」(vol. II p.289)

〈18〉 時に、具寿阿難は長老比丘たちに (there bhikkhū) 言った。「世尊が般涅槃されるときに、私に言われました。『サンガは (saṃgho) 私の滅後にチャンナ比丘に梵壇を命じなさい』と。梵壇というのは、チャンナが比丘等にその欲する如く語ったとしても、比丘等はチャンナ比丘に語ってはならない、教導してはならない、教誡してはならないということです」と。そこで長老比丘たちは「それでは友阿難よ (āvuso Ānanda)、あなた自身がチャンナ比丘に梵壇を命じなさい」と言った。阿難は「大徳らよ、私はどのようにチャンナ比丘に梵壇を命じましょうか、あの比丘は暴戻兇悪です」といった。長老比丘たちは「友阿難よ、それならば多くの比丘とともに (bahukehi bhikkhūhi saddhiṃ) 行きなさい」と言った。そこで阿難は 500 人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに (mahatā bhikkhusaṃghena saddhiṃ pañcamattehi bhikkhusatehi) (1) 流れを上る船に乗ってコーサンビーで降り、ウデーナ王の園に近い一樹下に坐った。Vinaya「五百韃度」(vol. II p.290)

(1) 「上首とする」としないけれども、〈8〉の駆出羯磨の際の状況とよく似ている。

〈19〉あるとき世尊は舎衛城のジェータ林の給孤独園に住しておられた。その時世尊は「私は3ヶ月間独坐したいから、一人の食事を運ぶ者 (*piṇḍapātanihāraka*) を除き、誰も私のところに近づいてはならない」といわれた。そこで舎衛城のサンガは「もし世尊に近づいたら波逸提の罪に処す」という規則を作った (*katikā katā hoti*)。そのときウパセーナ・ヴァンガンタプッタ (*Upaseno Vaṅgantaputto*) は、衆を率いて (*sapariso*) 世尊のもとに到り、世尊を礼して一方に坐った。客比丘に親しく挨拶するのは諸仏の常法であったから、世尊は挨拶をされ、一人のウパセーナの弟子比丘 (*saddhivihārika bhikkhu*) に「あなたは糞掃衣を喜んで着ているのですか」と尋ねられた。その比丘は「いいえ、喜んで着ているではありません」と答えた。そこでさらに世尊は「どうしてあなたは糞掃衣者なのですか」と尋ねられた。比丘は「和尚 (*upajjhāya*) が糞掃衣者だからです。だから私も糞掃衣者なのです」と答えた。そこで世尊はウパセーナに「あなたのこの徒衆 (*parisā*) は清らかな心 (*pāsādikā*) をもっている。あなたはどのように徒衆を指導している (*vineti*) のですか」と尋ねられた。ウパセーナは「具足戒を求める者に、私は阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者である。もしあなたも阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者でありたいなら具足戒を与えましょう、といいます。もし承知すれば私は具足戒を与え、もし承知しないならば具足戒を与えません。依止を求める者 (*yo maṃ nissayaṃ yācati*) にも同様にしています」と答えた。世尊は善哉善哉と褒められ、ウパセーナにさらに「あなたは舎衛城のサンガの規則を知っていますか」と尋ねられた。ウパセーナは知らないと答え、さらに「私たちは世尊が制定されないものを制定せず、制定されたものは廃しません。制定された学処を守っていきます」といった。世尊は「制定されないものを制定するべきではないし、制定されたものは廃すべきではない。制定された学処は守られるべきである。阿蘭若住者、乞食行者、糞掃衣者は私に会いたいならば随意に来ることを許す」と説かれた。 *Vinaya Nissaggiya 015 (vol.III p.230)*

このうち〈19〉の文章の形式はかなり他のものと異なるが、内容によってこれも資料の一つとなりうると考えたものである。

[2-2] 次は共にいた比丘あるいは比丘尼たちを「サンガ」とせず、単に「比丘たち」「比丘尼たち」としかならないケースである。資料の番号は前項に続ける。

〈20〉あるとき世尊はコーサンビー、ゴーシタ園に住されていた。その時遊行者サンダカ (1) は (*Sandako paribbājako*) 500人の遊行者たちからなる遊行者の大衆とともに (*mahatīyā paribbājakaparisāya saddhiṃ pañcamattehi paribbājakasatehi*) ピラッカ窟 (*Pilakkha guhā*) に住していた。時に阿難は夕刻独座より起って、比丘たちに言った。「友らよ (*āvuso*)、私たちは石窟を見るためにデーヴァカタソッパ (*Devakaṭasobbha* 天作溝) に行こう」と。比丘たちは「そうしましょう、友よ (*evam āvuso*)」と同意した。そうして具寿阿難は多くの比丘たちとともに (*sambahulehi bhikkhūni saddhiṃ*) デーヴァカタソッパに行った。 *MN.076 Sandaka-s. (サンダカ経 vol. I p.513)*

(1) サンダカも同じような表現をされているけれども、これは邪命外道の遊行者である。そして

その集団は **parisā** と表現されている。

- 〈21〉あるとき世尊は釈迦国のカピラヴァットウ・ニグローダ園に住されていた。この時、具寿阿難は多くの比丘たちとともに (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) ガターヤ釋種 (Ghaṭāya-sakka) の家で作衣をなしていた。夕方世尊は独座から起って、このガターヤ釋種の家に来られ、設けの座につかれた。そして世尊は阿難に話しかけられた。「阿難よ、カーラケーマカ釋種 (Kālakhemaka sakka) の家に多くの床座が設けられている。そこに多くの比丘らが住しているのですか」と。阿難は「世尊よ、カーラケーマカ釋種の家には多くの床座が設けられており、そこに多くの比丘らが住しています。私たちの作衣の時 (cīvarakāmasamaya) が来りましたから」と答えた。世尊は「衆会を楽しみ (saṃgaṇikārāma)、衆会を喜び (saṃgaṇikārata)、衆会に満足し (saṃgaṇikārāmata)、群れを楽しみ (gaṇārāma)、群れを喜び (gaṇarata)、群れに喜悅する (gaṇasammudita) ことを専らとする比丘は輝かない、……」と説かれた。*MN.122 Mahāsuññata-s.* (空大経 vol.Ⅲ p.109)
- 〈22〉ある時、世尊は舍衛城のジェータ林の給孤独園に住されていた。そのときゴータミー・マハーパジャーパティは 500 人の比丘尼たちと共に (pañcamattehi bhikkhunīsatehi) 世尊の所に行き、「世尊は、諸の比丘尼たちに教誡してください。教えをたれて下さい。説法をしてください」と願ひ出た。そこで諸の長老比丘は (therā bhikkhū) 順次に比丘尼たちに教誡した。*MN.146 Nandakovāda-s.* (教難陀迦経 vol.Ⅲ p.270)
- 〈23〉世尊は王舎城の靈鷲山に住しておられた。そのとき具寿舍利弗は多くの比丘たちと共に (sambahulehi bhikkhūhi saddhim)、釈尊からほど遠からぬところを經行していた。具寿大目犍連は多くの比丘たちと共に (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) ……。具寿大迦葉は多くの比丘たちと共に (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) ……。具寿アヌルッダは多くの比丘たちと共に (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) ……。具寿ブンナ・マンターニプッタは多くの比丘たちと共に (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) ……。具寿ウパーリは多くの比丘たちと共に (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) ……。具寿阿難は多くの比丘たちと共に (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) ……。提婆達多も多くの比丘たちと共に (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) ……。そのとき釈尊は比丘たちに告げられた。「見なさい、舍利弗は多くの比丘たちとともに (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) 遊行している。これらの比丘たちはみな大慧の者 (sabbe kho ete bhikkhū mahāpaññā) である」と。……「目連の比丘たちはみな大神通の者 (mahiddhika) である」。……「摩訶迦葉の比丘たちはみな頭陀説の者 (dhutavāda) である」。……「阿那律の比丘たちはみな天眼者 (dibbacakkhuka) である」。……「ブンナの比丘たちはみな説法者 (dhammakathika) である」。……「ウパーリの比丘たちはみな持律者 (vinayadhara) である」。……「阿難の比丘たちはみな多聞 (bahussuta) である」。……「提婆達多の比丘たちはみな有罪者 (pāpiccha) である」として、衆生は性質によって (dhātuto) 合流し (saṃsandanti)、集合する (samenti) と説かれた。*SN.014-015* (vol.Ⅱ p.155)
- 〈24〉ある時具寿舍利弗は王舎城の靈鷲山に住していた。その時具寿舍利弗は多くの比丘たちと共に (sambahulehi bhikkhūhi saddhim) 靈鷲山から下りつつ、大きな木材の聚り

を見て、比丘らに言った。「友らよ (āvuso)、あなたたちはあの大きな木材の聚りを見るか」と。比丘らは「はい見ます、友よと (evam āvuso)」と答えた。舍利弗は「神通を具え、心自在を得た比丘は、欲するならば、この木材の聚りをただ地と信解することができる (dārukkhandham paṭhavī tveva adhimucceyya)。なぜか。あの木材の聚りの中に地界があり、それによって神通を具え、心自在を得た比丘はかの木材の聚りをただ地と信解することができるのである」と説いた。AN.006-004-041 (vol.III p.340)

〈25〉ある時世間光、人御者はヴェーサーリーの大林重閣講堂に住されていた。その時勝者の母の妹マハーゴータミー比丘尼はその楽しき城の比丘尼住所に解脱した 500 人の比丘尼たちと共に (bhikkhunīhi vimuttāhi satehi saḥapañcahi) 住んだ。そのとき彼女の心に、「仏の般涅槃も、一雙の最上弟子や、またラーフラ・阿難・ナンダの〔涅槃をも〕私は見るできないであろう。私は世主、大仙の許しを得て、寿命行を捨てて寂靜に行こう」という思いが生じた。このような思いは五百の比丘尼らにも、ケーマーらにもあった。その時地震があり、天の鼓が鳴り、比丘尼住处に住んでいる諸の天が涙を流した。一切の比丘尼たちはゴータミーのもとに行き、「聖尼よ (ayya)、山もろともに大地が動き、天の鼓が鳴り、泣き声が聞こえました。どういうわけでしょうか」と尋ねた。…… Apadāna 04-02-017 (p.529)

〈26〉(ヤソーダラー比丘尼は) 大神通があり、大慧がある五百の比丘尼たちを従えて (purakkhatā bhikkhunīhi satehi saḥa pañcahi mahiddhikā mahāpaññā)、等覚者のもとに行き、等覚者に「私の最後〔有〕は転じて 78 年となりました。私は少ない生命を捨てて (paritta mama jīvitam pahāya)、自らの帰依所に行き、今夜寂滅を得たいと思います、……」と云った。Apadāna 04-03-028 (p.584)

〈27〉世尊は「サンガは提婆達多のために王舎城において顕示羯磨をなせ (saṃgho Devadattassa Rājagahe pakāsaniyakammaṃ karotu)。提婆達多の以前の本性と今の本性は異なる (pubbe Devadattassa aññā pakati ahoṣi idāni aññā pakati)。提婆達多が身・語によってなすところのものによって仏・法・僧は見られるべきではない、提婆達多のみが見られるべきである (yaṃ Devadatto kareyya kāyena vācāya na tena buddho vā dhammo vā saṃgho vā daṭṭhabbo, Devadatto 'va tena daṭṭhabbo)」と言われた。そしてそれをサンガが白二羯磨によって決定すべきことを指示され、舍利弗に「あなたが提婆達多を王舎城において顕示せよ」と命じられた。舍利弗は「以前、私は提婆達多に対して王舎城においてゴードイプッタは大神通・大威力の持ち主だと讃歎しました (pubbe mayā bhante Devadattassa Rājagahe vaṇṇo bhāsito mahiddhiko Godhiputto mahānubhāvo Godhiputto)。私はどのように提婆達多のために顕示しましょうか」と質問した。そこで世尊は白二羯磨によって舍利弗を選ぶことを指示された。選ばれた舍利弗は王舎城において、先の通りに提婆達多を顕示した。無信の人々は「この沙門釈子らは提婆達多を嫉妬しているのだ」と言い、有信の人々は「これはただ事ではない、世尊が王舎城において提婆達多を顕示されるとは」と云った。Vinaya「破僧韃度」(vol.II p.189)

〈28〉その日は布薩であった。提婆達多は五事を持して住する者は籌を取れと言ひ、ヴェー

サーリーのヴァッジ族出身の新参の比丘500人 (*Vesālikā Vajjiputtakā pañcamattāni bhikkhusatāni navakā*) がこれ法なり、これ律なり、これ師の教えなりと思って籌を取った。提婆達多はサンガを破し (*saṃghaṃ bhinditvā*)、500人の比丘を引き連れて (*pañcamattāni bhikkhusatāni ādāya*) ガヤーシーサ (*Gayāsisa*) に去った。世尊は舍利弗・目連に彼らを連れ戻すように命じられた。その時、提婆達多は大衆に圍繞せられて (*mahatiyā parisāya parivuto*) 法を説いて坐していた。提婆達多は舍利弗・目連を喜んで迎え、舍利弗に半座を分かって招いた (*upaḍḍhāsanena nimantesi*)。舍利弗・目連は一の座をとって坐った。提婆達多は説法に疲れたと、舍利弗に説法をまかせて右脇して眠った。*Vinaya* 「破僧健度」 (vol. II p.198)

このうち〈27〉と〈28〉は他の用例の文脈と異なるが、内容としてはこれもこの一群の資料に加えうるものと考えた。

[3] 以上が「仏弟子の誰かを上首とするサンガ」、ないしは「仏弟子の誰かを指導者とするサンガ」と考える資料である。

[3-1] ここでは厳密を期するために、仏弟子の誰かを「上首とするサンガ」ないしは「上首とする集団」と明言する資料と、「上首」とはしないが指導的役割を担う仏弟子の誰かが「サンガ」とともにいたと表現される資料と、さらにはこの指導的役割を担う仏弟子の誰かが多くの比丘あるいは比丘尼と共にいたとする資料と、3種類に分けて紹介した。

しかし例えば〈18〉は、阿難がチャンナに梵壇を命じるために「500人の比丘たちからなる大比丘サンガとともに」コーサンビーへ向かったとするのみであるが、〈8〉〈9〉はアッサジ、プナッバスカの徒の比丘等にキターギリからの驅出羯磨を行なうというもので、ここでは「舍利弗と目連を上首とする比丘サンガ」がキターギリに行ったと表現されている。あるいは〈18〉の場合は、「500人の比丘たち」は結集に参加した「長老比丘」たちとも考えられなくはないが、「多くの比丘たちと一緒にいけ」と命じたのはその長老比丘たちであるから、この阿難に同行した500人の比丘は長老比丘とは異なる、阿難の弟子たちであったであろう。このように〈18〉と〈8〉〈9〉は同じようなシチュエーションであって、だから単に「阿難が500人の比丘たちと共に」というのも、「舍利弗と目連を上首とする比丘サンガ」として「上首」という言葉を使うのも、内実においては相違がないものと考えられる。

また〈23〉は舍利弗・目連・摩訶迦葉・アヌルッダ・ウパーリ・阿難など十大比丘と称されるような仏弟子たちが「多くの比丘たちと共に経行していた」とするのみで、「上首とするサンガ」とも「大比丘サンガ」とも表現されていないが、内容から言えばこれも「舍利弗と目連を上首とする比丘サンガ」などと相違のないものと考えて差し支えないであろう。したがってこの3種類の資料を「仏弟子を上首とするサンガ」資料の範疇にあるものとして、同等に扱うことにする。

[3-2] ただし先に紹介した資料はかなり幅広く集めたので、あるいはこの中に含めることは不都合というものも含まれているかも知れない。

例えば〈14〉は、大樹と大きな枝のたとえが説かれる経であるが、ここでいわれる「大比丘サンガ」を「舍利弗を上首とする大比丘サンガ」と理解したのであるが、あるいはこれは「釈尊のサンガ」をさし、「釈尊のサンガ」は舍利弗という大きな枝が先に壊しても存続す

るということを表すのかも知れない。しかし一連の「釈尊のサンガ」の存在を追及してきた経緯から言うと、その可能性も否定することはできないが、しかしこれは「舍利弗を上首とするサンガ」がたとえ舍利弗という大きな枝が壊したとしても、そのサンガは確固として残るといふふうに理解すべきであろうと判断したのである。

[3-3] またここには明らかに性格の異なるサンガが含まれていることも指摘しておかなければならない。資料〈16〉は第1結集の記事であって、摩訶迦葉は確かに選ばれた500人の長老比丘たちからなるサンガのリーダー的な位置についてのもと考えられるが、このサンガは資料〈15〉のいう、摩訶迦葉がパーヴァーからクシナーラーに向かっていたときに共にいた「500人の比丘たちからなる大比丘サンガ」とは異なるであろう。このサンガはまさしく摩訶迦葉が指導者であって、他の500人はその弟子であったであろうからである。

そしてもちろんここで取り扱おうとしている「仏弟子を上首とするサンガ」は、この資料〈15〉のようなサンガのことである。

[4] それではここで取り扱う「仏弟子を上首とするサンガ」とは具体的にはどのようなサンガを言うのであろうか。

[4-1] 資料〈19〉はウパセーナが衆を率いて (*sapariso*) 三月独坐に入られた世尊を訪ねて行き、彼らが阿蘭若住者・乞食行者・糞掃衣者であることを褒められたという経である。この集団は明らかにウパセーナが和尚 (*upajjhāya*) であり、阿闍梨 (*ācariya*) であって、彼に率いられる比丘たちは明らかに共住弟子 (*saddhivihārin*) であり、内住弟子 (*antevāsaka*) である。

「律蔵」に定められた正式の具足戒は、釈尊のみがもつ特権的な「善来比丘具足戒」を別にすれば、「十衆白四羯磨具足戒」であり、特例として辺国では「五衆白四羯磨具足戒」が認められている。これらは十人あるいは五人以上の授戒に関わることができる資格を持った比丘たちが律の規定にしたがって、合議してサンガへの入団を許可するのであるが、その規則の一つが出家具足戒を望む者は必ず指導者としての和尚を決め、その弟子とならなければならないということである。それが和尚と共住弟子の関係であって、その弟子が特別に優秀でないかぎり最低10年間は独立が許されず、住み込み徒弟として和尚に奉侍し、和尚はこの弟子の生活万般の面倒を見なければならない。

しかし10年たたない間に、和尚が亡くなるとか還俗するなどの特別の事情があって、和尚がいなくなった場合は、この和尚の代わりに誰か別の指導者を求めなければならない。この関係が阿闍梨と内住弟子である。

資料〈19〉においてウパセーナが「具足戒を求める者に、私は阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者である。もしあなたも阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者でありたいなら具足戒を与えましょう、といいます。もし承知すれば私は具足戒を与え、もし承知しないならば具足戒を与えません。依止を求める者にも同様にしています」というのは、自分が和尚となるとき、あるいは阿闍梨となるときには、共住弟子あるいは内住弟子に阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者であることを承知させるということの意味する。そしてウパセーナのサンガは、このような条件を承諾した共住弟子や内住弟子たちから成り立っていたのである。

[4-2] この和尚あるいは阿闍梨と弟子の関係は、〈8〉〈9〉資料にも、〈13〉資料にも現れている。資料〈13〉は阿難が大比丘サンガとともに南山に遊行する間に、30人ほどの共住弟子の比丘たち (*tiṃsamattā saddhivihāriṇo bhikkhū*) が還俗してしまったというものである。これはその時点でもまだ「共住」していたわけであるが、〈8〉〈9〉資料はキターギリの悪比丘を駆出する羯磨の執行者として舍利弗・目連を派遣するときに、世尊は「行け、舍利弗らよ、キターギリに往きアッサジ・プナッバスカの徒の比丘等にキターギリからの驅出羯磨を行いなさい。彼等はあなたがたの共住弟子である (*tumhākaṃ ete saddhivihāriṇo*) 」といわれたとされているから、かつての共住弟子はすでに独立していたのである。しかしこの関係は一生涯続くから、世尊はすでに独立している悪比丘たちに対する驅出羯磨の執行の役割を、舍利弗たちに命じたのである。

しかしこのように独立することもあったであろうが、10年間を経過して一人前の比丘となった後も、昔と同じ和尚のもとで一つのサンガを形成するということが多かったであろう。500人というのは大袈裟であるが、このような大勢の共住弟子を一人の和尚が指導するのは無理であって、また決して勧められることではない。そこで500人もの大比丘サンガはこの親子に比される初代の和尚の共住弟子が、一人前になってその弟子を取り、さらにその弟子がまた弟子を取るというふうには、あたかもインドの大家族のように、何世代もの和尚と共住弟子、阿闍梨と内住弟子が集まって形成されたものと考えられる。しかし大家族の族長は一人であるように、このサンガのおおもともまた一人の、いわば大和尚というべき人物であって、ウパセーナのようにそのサンガ全体を指導・統制していたのである。

なおこのサンガは建前としては閉ざされた集団ではなく開かれた集団であって、出るのも自由、入るのも自由であって、特に布薩などのサンガ行事には旅の途中の出家修行者も参加しなければならないことになっていた。しかし資料〈1〉や〈4〉に描かれているように、そこには「旧住比丘」と「客来比丘」という区別があり、日常的にはこの「旧住比丘」や「客来比丘」はひとかたまりになって行動していたのであって、おそらくそれほど活発な流動があったわけではなかったものと考えられる。また正式にこの組織に入るためには、ウパセーナが入団の条件を示してそれを承知させたように、「サンガの上首」の許可も必要としたであろう。サンガは和合しているがゆえに「サンガ」であって、この「和合」がサンガ運営の最大の理念であり、この和合を保つうえでも、このような管理は必要であったであろうと考えられる。

[4-3] 「仏弟子を上首とするサンガ」とは上記のようなサンガであったとすると、結集の際に選ばれた500人の長老比丘からなる資料〈16〉のサンガは、ここから除外されるべきであろう。

[5] さて、上記のように規定する「仏弟子を上首とするサンガ」とこれに類する資料を、いくつかの視点から整理してみよう。

[5-1] まず「上首」とされ、「指導者」と目される仏弟子は次のとおりである。

舍利弗・目連：〈1〉〈2〉〈3〉〈8〉〈9〉

舍利弗：〈12〉〈14〉〈23〉〈24〉〈27〉

目連：〈23〉

摩訶迦葉：〈10〉 〈15〉 〈16〉 〈23〉
クマーラカッサパ：〈11〉
阿難：〈13〉 〈18〉 〈20〉 〈21〉 〈23〉
プラーナ：〈17〉
ウパセーナ・ヴァンガンタプッタ：〈19〉
ヤソージャ：〈4〉
アヌルッダ：〈23〉
ブンナ・マンターニプッタ：〈23〉
ウパーリ：〈23〉
提婆達多：〈23〉 〈28〉
ヤソードラー（比丘尼）：〈5〉 〈6〉 〈26〉
ヤサーヴァティー（比丘尼）：〈7〉
マハーパジャーパティー・ゴータミー（比丘尼）：〈22〉 〈25〉

[5-2] またこれら仏弟子たちが共にいたとされる集団がどのように表現されているかを調査してみると次のようになる。

比丘サンガ：〈2〉 〈8〉 〈9〉
大比丘サンガ：〈3〉 〈12〉 〈13〉 〈14〉
500人の比丘たちからなる大比丘サンガ：〈10〉 〈11〉 〈15〉 〈17〉 〈18〉
500人の比丘たち：〈1〉 〈4〉 〈16〉 〈28〉
多くの比丘たち：〈20〉 〈21〉 〈23〉 〈24〉 〈27〉
衆を率いて：〈19〉
500人の比丘尼たち：〈22〉 〈25〉 〈26〉
1万人の比丘尼たち：〈5〉
1万8千人の比丘尼たち：〈6〉 〈7〉

[5-3] 次にこれらの仏弟子の誰かを指導者とする集団が、何をしたかということ調査してみると次のようになる。

遊行：〈1〉 〈3〉 〈4〉 〈10〉 〈11〉 〈12〉 〈13〉 〈15〉 〈17〉 〈18〉 〈19〉 〈20〉
聚落・園林に住す：〈14〉 〈25〉
作衣：〈21〉
遊行して駆出羯磨を執行：〈8〉 〈9〉
顕示羯磨を執行：〈27〉
食事に招待される：〈3〉
六支具足を布施される：〈2〉
世尊に挨拶：〈5〉 〈6〉 〈7〉 〈22〉 〈26〉
経行：〈23〉
説法：〈24〉 〈28〉

[6] 以上の整理をもとに若干の考察を施しておきたい。

[6-1] まずこれら「仏弟子を上首」とし、「仏弟子を指導者」とする集団は、「仏を上

首とするサンガ」とその内容においてほとんど相違はないということが言えるであろう。例えば資料〈3〉は「舍利弗と目連を上首とするサンガ」がナンダマータ優婆夷に食事を招待されるという状況が描かれているが、その前後の描写は「仏を上首とするサンガ」の招待の描写とほとんど同じである。また〈1〉と〈4〉は「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」が一つに溶け合って、一つのサンガを形成しているのであるから、この二つのサンガに質的な相違はないということの意味するであろう。

また人数は「仏を上首とするサンガ」の場合のように1,250人とか1,000人という大きな数字では表されないが、しかしながら500人とはされ、「大比丘サンガ」とされるのは同じである。

そもそも一般的に考えられている「サンガ」は仏弟子たちの集団であって、先に紹介したような500人とか、1,250人で構成される、仏弟子たちと同じようなレベルの「仏を上首とするサンガ」が存在したということ自体が、我々が想定していた範囲の外にあったといわなければならないであろう。

[6-2] そしてこの「仏弟子を上首とするサンガ」もまた「サンガ」と表現されるということは、これらが単に集団をさすのではなく、厳密な意味でのサンガであるということはいうまでもない。資料〈8〉〈9〉が駆出羯磨を行い、〈27〉が顕示羯磨を行い、また〈16〉〈18〉のサンガは選ばれた上座比丘から形成されるサンガであるから少し特異なサンガではあるが、それでも〈16〉が結集を行い、〈18〉が梵壇を行おうとしたのも、すべてサンガの行事としての羯磨として行ったのであって、この羯磨を行いうるというのがもっとも厳密なサンガの定義であるからである。

[6-3] そしてこの集団をもとに日常生活がなされていたことは、これらを単位として遊行や経行が行われ、食事に招待されたりするところに明らかである。

[7] 上の資料から明らかのように、パーリ聖典において彼らを上首としてサンガが形成されていたとされる仏弟子は、舍利弗・目連を初め摩訶迦葉・阿難など仏の十大弟子とされ、「具寿 (āyasmant)」と呼ばれる主立った弟子が多い。しかしその用例がそれほど多くないのは、聖典そのものが釈尊の行状記を残そうとしたものであるからであって、実際には釈尊在世中からすでに仏教は仏弟子たちによってインド各地に布教され、各地でたくさんの仏弟子たちが活動していたのであって、聖典に名を残されていない名もなき仏弟子を「上首とするサンガ」がインド各地に、たくさん存在したものと考えられる。このように推定される理由を以下にあげてみよう。

[7-1] 釈尊は成道からそう遠くない時期に、鹿野苑の比丘たちに「遊行せよ、同じ道を二人していくな。法を説け、梵行を顕示せよ」と説かれて、諸国に布教に出された。しかし彼らが諸国から出家希望者を連れて帰ってくるということをくり返すうちに疲れ果てたので、そこで出先で彼ら自身が三宝帰依具足戒によって自分の弟子をとってよいと許されたことによって、「サンガの原形」が形成されたのであって、仏弟子を上首とするサンガは仏教布教の最初期からまさしく各地に存在したと考えられる。

[7-2] しかしこの制度では規律が保てないという弊害もでて、そこで「和尚と弟子」の制が定められ、弟子は和尚の元で10年間は修行しなければならないということになった。

これをもとに「十衆白四羯磨具足戒」という正規の出家具足戒が制定されたのであって、このときに律蔵が規定する「サンガ」が成立したものと考えられる。要するにサンガはこのように仏弟子たる和尚と彼らの弟子という師弟関係が基本構造となっているのであって、これもまた釈尊の手を離れたところで、規律を保ちつつサンガが各地に散在することを前提としているのである。

[7-3] しかし地方では10人という具足戒を与えうる資格を有する出家者を揃えにくいということから、地方の特例として「五衆白四羯磨具足戒」が許されたのであって、これまたサンガがインド各地に散在していたことを明白に示している。

[7-4] また先に紹介した「第2論文」において述べたように、「四方からやって来る出家修行者を含むサンガ」が想定されなければならないのは、四方の各地に比丘らが存在し、これらの比丘たちは原則としてサンガのメンバーであり、そういったサンガが各地に存在していたという現実を物語っている。

[7-5] そしてそもそも「律蔵」の「犍度」に収められたサンガの運営に関する規定は、このような各地に存在するサンガが、釈尊の手を離れて、弟子たちのみで運営される必要があったがゆえに定められたものに外ならない。いわば「律蔵」に「犍度」があること自体が、インド各地にたくさんの「仏弟子を上首とするサンガ」が存在していたことを証明しているのである。

[8] ところでこのサンガの運営方法は、一般的には非常に民主的なものであったと考えられている。もっとも本論文においてはこれについて言及する余裕はなく、また別の論文を書くことにしているが、しかしおそらくそうではなかったというのが筆者の見解である。本資料の範囲内においてこれを証明すると考えられる記述を紹介しておく。

[8-1] そもそも「仏を上首とするサンガ」が民主的に運営されていたと考える者はいないであろう。律蔵の規定のすべては立法的機関があって、そこで合議をしたうえで制定されたのではなく、釈尊が独断的に制定された。そのような釈尊が指導するサンガが民主的に運営されていたとは考えられないからである。世尊の位置がどのようなものであったかは明らかではないけれども、資料〈27〉は王舎城のサンガが提婆達多を顕示羯磨にかけるとも、舍利弗をその役割に選ぶことも、釈尊が命じて、形式的に白二羯磨によって決定されていることを見ても明らかである。

そして「仏弟子を上首とするサンガ」は質的に「仏を上首とするサンガ」と相違はないものであった。もしそうならこの「仏弟子を上首とするサンガ」も、必ずしも民主的に運営されたのではないということは容易に推測できる。

しかも先に考察したように、‘pamukha’という言葉は「指導者」「リーダー」という意を含む言葉として用いられ、しかも釈尊にも使われる言葉なのであるから、この‘pamukha’とよばれ、あるいはまた‘samghatthera’と呼ばれる者が指導するサンガが、その指導力を発揮せずに、民主的平等的に運営されたとは考えがたい。

サンガの中には衣を受納する係、衣を分配する係など、たくさんの役割を担当する者が決められており⁽¹⁾、これは白二羯磨によって専任されるのであるが、しかしサンガのリーダーとなるべき者の選任規定はない。これはサンガそのものが上首となるべき大和尚を中心に、

自然に形成されたものであるからであろう。

プーラナ・カッサパなどの六師外道の集団も等しくサンガとかガナと呼ばれているが、しかし彼らは「サンガの主 (saṃghin)」 「ガナの主 (gaṇin)」 「ガナの教師 (gaṇācariya)」 と呼ばれていた⁽²⁾。 ‘-in’ は所有を表す接尾辞であって、六師外道の集団が民主的に運営されていたということは考えにくいということも傍証となりうるであろう。

(1) 拙著『初期仏教教団の運営理念と実際』(国書刊行会 2000.12) p.059 参照

(2) DN.02 *Sāmaññaphala-sutta* (vol. I p.047 以下)

[8-2] 資料〈19〉は、ウパセーナがそのサンガの構成員に阿蘭若住者・乞食行者・糞掃衣者であることを要求していた。また〈23〉にはサンガ全体が、この上首とされる上座比丘の色に染まっていたことが描かれている。もちろん10年間の依止期間にある共住弟子や内住弟子は和尚・阿闍梨の命令は絶対服従に近かったであろうし、10年間の依止義務を終えた比丘であってサンガのリーダーと気心が通じない者は自然にこのサンガから離れることになって、自然にサンガの色はその指導者の色に染まっていったものと考えられる。そのようなサンガが民主的平等に運営されていたとは考えにくい。

[8-3] この「仏弟子を上首とするサンガ」は、例えば〈24〉では舍利弗が、そして〈28〉では提婆達多がサンガの構成員である比丘たちに法を説いている。このように法を説く立場の者と、法を聞く立場の者は基本的に異なるのであって、法を説くのはまさしく仏と同じような姿勢ということができよう。おそらく釈尊が舍利弗や目連に自分に代わって説法させたのも、そういう自覚があったからであろう。

また資料〈13〉では遊行の間に弟子たちを還俗させてしまった阿難が摩訶迦葉から非難されている。このように上首となる比丘の指導力が要請されていたのである。また〈8〉や〈9〉において、駆出羯磨を行うのはその和尚であった舍利弗や目連であるべきだとされているのも、その現れであるといえるであろう。

[8-4] しかしこの問題は重要であり、サンガ運営規則全体から論考されなければならない。したがって別の機会に改めて詳しく論じたい⁽¹⁾。

(1) 「中村元選集 決定版」第5巻『インド史Ⅰ』(春秋社 1997.3) p.329に、『マハーバーラタ』のガナの指導者 (saṃghamukhya, gaṇamukhya) のあるべき姿勢が紹介されている。「ガナの指導者たちは特に尊敬されるべきである。世間の営みは大いに彼らに依存している。国の秘策を守ること(秘密にすること)とスパイを派遣することは、指導者たちのなすことである。ガナが全体として国の秘策を知ることはよろしくない。むしろガナの指導者たちは(秘密に)集合して協力してガナの利益をはかるべきである」